

琉球大学学術リポジトリ

牛の生産を高めるために

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡嘉敷, 綏宝, Tokashiki, Suiho メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19742

2 甘いものは満腹感があるし、塩からいものは水分をほしがり
ますので、そのためにお腹だけが一杯になり他の食物の必要量
をとる事が出来なくなります。

形は流動食から始めて半流動食に移り、しだいに固いもの

にかえます。

温度はお乳の温度と同じ位の大体三十七度位で私達の体温と
同じ位だとお考えになれば間違いありません。

食べたがらない時には口ざわりや味をかえて見るとか色のと
り合せを考えてみましょう。

その他の注意について

離乳といくましてもすつかり他の食物に切りかえる迄
には何ヶ月もかかりますその間も乳汁はたえず与え
続けますので乳汁についても気を配らなければなりま
せん。人工栄養の場合にはミルクの罐は一度あけまし
たら出来るだけ早く使うようにしましょう。その時使
うさじは使う度に別の容器に保存し使ったものを罐の
中に入れないように致しましょう。

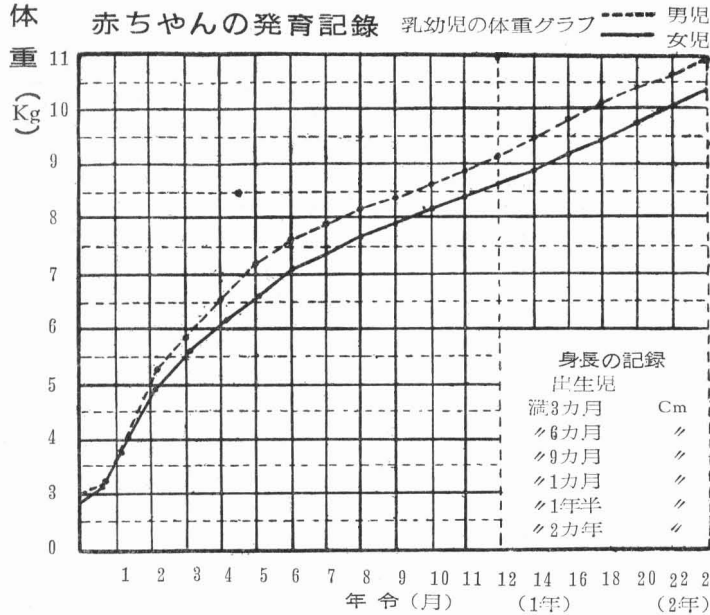
又ビタミンをこわさないためにお湯は飲める程度の
温度にさましてからミルクを作ります。

◎最後に

離乳が順調に進みますと赤ちゃんの体重も順調に増加
致しますけれども若し途中で失敗した時には一段前の
食事にもどり、それでもまだ思わしくない時には更に
と前へもどります。よくありませんが今迄よりも速度
を早めて、早く元の所迄行けるように致します。

以上の事に充分気を配りこの暑い夏を離乳期にある赤
ちゃんが無事に過す事が出来るようにしてあげましょ
う。

(暮納澄子)



牛の生産を高めるために

ここ数年來軍用牛肉の需要増加に伴って牛の飼育熱が次第に
高まってきた。現在全琉に飼育されている役肉用牛の頭数は一

万三千頭程度であるが、昨年に屠殺された牛の総数はその半分
の六千六百頭、年間生産千頭とすると沖縄は外地から牛を入れ

ないかぎり三年後には増無の状態になるわけだが、実際は毎年
すこすこではあるが牛の養育頭数は増加の一途を辿っている
このことは毎年数千頭の牛が入っているということになる。

つまり表面上は相当弗をかせているが、その利益は半減す
る。牛の増殖の必要なる所以もそこにあるわけだが、生産は遅
々として進まない。では今後どのような対策をすればよいだろ
うか。以下が増殖手段について、三考察を加えてみたい。

一、繁殖状況の基礎調査

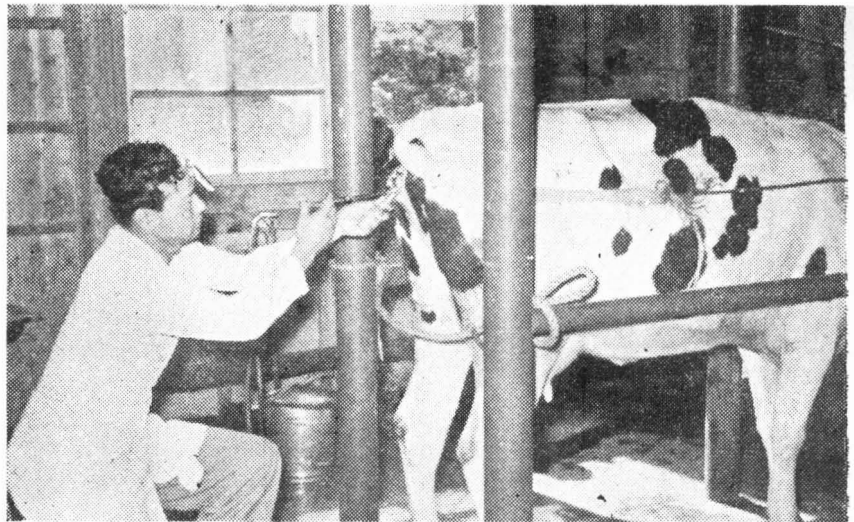
繁殖状況の基礎調査は繁殖牛の実態を知るために必要である
調査範囲は全琉を対照にした方が望ましいが、調査資料をまと
めるのに相当長時日を要すると思われるので地域を選定して実
施するのみの方法である。調査項目としては飼育雌牛の年
令別頭数、成雌牛の状況(妊娠頭数、胎否不明頭数、空胎頭数
栄養状態等)、年間生産仔数、死産流産の発生回数等について記
録することが必要である。

この結果繁殖牛が何頭で、その生産率は何%であるかがわかり
そして繁殖の障害になつている原因も略々明かにされるものと
思われる。

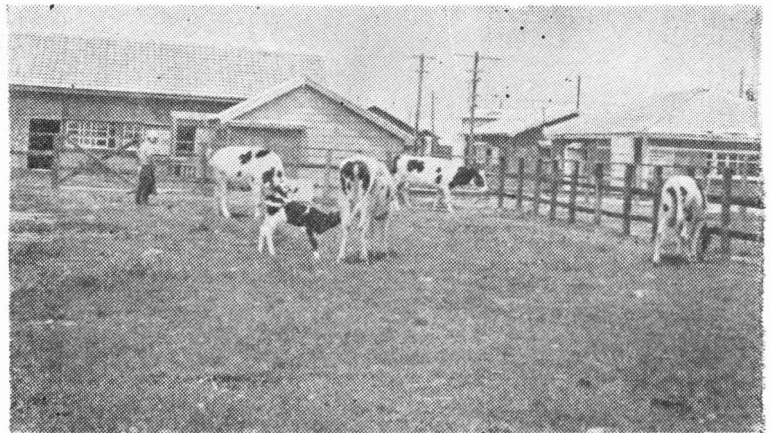
二、繁殖障害防除事業の実施

日本に於ては昭和一九年度より主要乳牛地帯の一道七県につ
いて乳牛の繁殖障害防除事業を実施した。事業開始前の調査に
よると(昭和十八年)成雌牛三七、四六〇頭中二一、五二三頭
の産とくが生産され、その生産率は僅かに五七%にすぎなかつ
た。事業開始以来の妊娠状況をみると一九年八月末には一九年
三月末に比べて約三%の妊娠率の増加をみている。

空胎の状況(生理的空胎を除く)をみると一九年三月末一五、
七%のものが同年八月末の調査によると二〇、五%となり、さ
らに三〇年三月末には七、七%と減少し、事業開始前調査時の
空胎率の半分に減つている。このことからみて繁殖障害防除事
業は着々として効果を挙げているといえる。この減少の主な理



由は病的空胎つまり繁殖障害が漸減したことによるものが多い。即ち昭和一九年三月末には病的空胎は飼養成雌牛四一、六九九頭中三、四六七頭八・三%だったものが、一年後の昭和三十年三月末には飼養成雌牛四七、四七二頭中一、六七三頭(三・五%)に減少した。



写真上は筆者による人工授精のスナップで・下は運動場にたわむれる本学部
のオヤウシ・コウシ

病的空胎率(一九年三月より三〇年三月までの累計八、三四五頭中卵巣疾患が関係しているもの五、〇六七頭(六〇・七%)子宮疾患が関係しているもの三、九五三頭(四七・四%)で卵巣疾患がもっとも多発している。卵巣疾患の内もっとも多いのは卵巣機能減退で、その次は卵巣腫瘍となり、又子宮疾患は殆んどが子宮肉腫である。これ等の疾患臨床的に治癒したと認められたのは六、〇八四頭(七一・九%)で、その内四、九四九頭(八一・四%)が妊娠した。
このように見てくると病牛の約六〇%は再び繁殖に活用されたことになる。沖繩に於てもこの種の事業は是非実施したい

のである。

三、生産地域の設定

農家の経営のありかたは地域によつて相当異なってくる。即ち耕地面積の大小、畑作と水田の割合、放牧地の有無等によつて各々適応する家畜が取り入れられるが、牛の生産は放牧場をもつた処が適当である。それは仔牛の発育にとつて好結果をもたらす且又生産量の低減を図ることが割合容易だからである。平坦地の農家で牛を農耕に使いながら仔牛も生産していくといった処は所謂準生産地として設定し、こういったところは仔牛を一三頭生産したあとの母牛は肥育用に売却し、新しく優秀な繁殖雌牛に取換える方法がよいと思う。生産地の設定に伴つて繁殖牛を増加せしめ、逐次需要をみたす方途へ進めていくべきかと思う。幸い経済局あたりでも生産地の設定を考慮されているようであるから是非実現させて欲しい。

四、人工授精の強化

八重山あたりの年中放牧地帯にあつては種雄も一緒に放牧しているようであるから雌牛の受胎の機会が多いので、人工授精の必要は認められないが、舎飼にあつては交配は人為的に支配されているので人工授精によつた方が種雄の効率や受胎率の面からも効果的と考へる。この場合人工授精所に種雄を集中管理しておき、そこから定期的に町村の繁殖地帯へいつても必要あれば使えるように精液が輸送されることが望ましい。之等の地帯には人工授精師が配置されて業務の遂行に万全を期すようにすべきである。

五、生産費の低減

牛肉の販路が拡張されて年間数千頭の牛が現地で屠殺処分されるようになったことは基地経済のお蔭である。この屠殺頭数が今後上昇線をたどるかどうかは生産費の問題と密接な関係がある。前にも述べたように繁殖地帯は放牧の出来る処が望ましいといつたが、そのような地域では経費が割安につからに外

ならない。実際の飼育にあつてどの程度の費用がかかるかは私も資料を持たないので不明だが、少なくとも現住より減減させよう努力することが、販路拡張に有利に展開することは確かである。それと共に草質の改善を図つて栄養価の高い粗飼料を給与することも大切なことである。草質の改善はそう簡単には出来ないだろうが、将来是を考へなければならぬ問題である。

以上牛の生産を殖やす方途について述べたのであるが、現在不妊牛は左から石に販売され、あけくの果は屠殺される運命にある。幸いに家畜の登録制度も満足したので、今後は品種の

改良も意強に向上する事と思われる。そうなることやほり優良種は長く繁殖につかいたいという意欲が生れる。そこにはかならず空胎防止事業も芽を出すものと思われる。生産の増加はかけ声だけではどうにもならない。真に農民の理解と協力によつてこそ達成されるものである。

牛は馬と違い年中平均二十一日毎に発情を繰返しているから好む時に種付し、分娩させることが割合簡単に出来る。どうぞ交配の適期をみはからつて受胎せしめ、生産を高めていきましよう。
(渡嘉敷純臣)

可変半径プロット法による 林分材積測定法について

一、はじめに

最近可変半径プロット法による林分材積測定法が、その理論と実際において実用的であるという所から推奨されてきている。この測定法はBitterlichが一九四八年にその基礎をきつたものと考えられるが、日本においては一九五二年九州大学農学部木梨謙吉助教授により、又一九五三年林野庁中斐原一朗技官により、その研究が発表され本法が目されるようになったもので其の後種々の研究発表がなされている。

以下本法の紹介をして斯面に興味ある方法の御参考に供したいと思う。但し筆者は未だに本法を使用した事がなく測定結果

の資料を供し得ないのは甚だ残念であるが、御了承をこの次第である。尚紹介の順序としては木梨、小林両氏の方々についでに、その後東大扇田正二助教授によつて考案されたものについて述べていきたいと思います。

二、材積測定の概要

木梨、小林両氏の研究はL. R. Grossenbaughの測定器に改良を加えられたものであるがその概要は次の通りである。

巾20cmの板をとりつけた長さ50cmの測定棒により一点に立ち、測定棒の可視孔から胸高直径を望み、先端にとりつけ

た20cm巾の板よりはみ立した立木を、一回転して数えた本数(N)に四を乗すると、その点におけるna当胸高断面積が得られ、これに中央木樹高(H)と中央木胸高形数(F)を乗することによりna当材積(V)が得られるのである。即ち

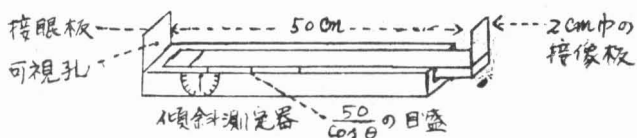
$$V = 4N \cdot H \cdot F$$

4を断面積乗数(断面積乗数)という。断面積乗数は測定棒の長さ、接像板の巾等によつて変わるもので、ここでは測定棒の長さ50cm、接像板の巾2cmとしてのべていくことにする。

三、測定器のつくり

測定器は第1図及第2図の如く、長さ50cmの棒の一端に接像板、他端に巾2cmの接像板、(鉄板、セルロイド厚紙

※1 図 (熊本管林局、小林四郎技官考案)



※2 図 (木梨助教授考案)

